



# 健康と競技の心理

## Psychology of Health & Sport

### 目次:

特集 九州スポーツ心理学会第21回大会報告 ～成人後の新たなる飛躍に向かって～	2
博士論文紹介	6
研究アラカルト ～私の研究室の紹介～	8
2008-2009年 関連学会大会日程	10
九州スポーツ心理学会の紹介と学会入会申込様式	11
おわりに	12



メンタルトレーニングフォーラム (2008.3.7)

特集 九州スポーツ心理学会第21回大会  
～ 成人後の新たな飛躍に向かって～

第21回大会を終えて

九州スポーツ心理学会理事長  
磯貝 浩久

九州スポーツ心理学会の第21回大会は、福岡大学セミナーハウスで平成20年3月8日、9日に開催されました。前日には2回目となるメンタルトレーニングフォーラムも無事行われました。会場となった福岡大学セミナーハウスは、近年の利用は少なくなったものの頻りに利用されてきた場所であり、また第1回大会が行われた場所でもあります。20回の節目を終えて、再び九州スポーツ心理学会の原点を見つめ直すという意味でも良い場所だったと思います。

内容的にも充実していたのではないかと思います。特別講演では、日本一を何度も達成している吉村監督に、女子バスケットボールのチームマネジメントについて話して頂きました。実践的なお話は心理学の知見をどのように活かすかを考える参考となりました。競技スポーツに関するシンポジウムでは、競技力を向上させるために運動学習理論をどのように活用するか議論され、健康運動心理に関するシンポジウムでは、健康づくりにマーケティングの手法を用いることなどについて議論されました。どちらのシンポジウムも活発に意見交換されていたようです。

ワークショップでは、チームビルディングや認知行動療法の基礎や実践への応用に関して紹介されました。学生企画では、学生研究者の立場からより良い研究活動をするために何が大切か話し合われました。ポスター発表は、会員の皆様の積極的な姿勢のお陰で演題数24となり、また内容的にも興味深い発表が多かったように思います。さまざまな企画にご登壇頂いた先生と進んで発表して頂いた先生に感謝申し上げます。

連合事務局で行う2回目の大会でしたが、無事運営できたのは理事の先生方、事務局スタッフ、学生の協力のお陰と感謝しております。来年度の大会は北九州市にある九州共立大学で行うことが決まりました。事務局最後の大会ですので、盛会になるようにしっかり準備して行きたいと思います。



## 特集 九州スポーツ心理学会第21回大会 ～ 成人後の新たな飛躍に向かって～

### 参加・発表報告

「シンポジウム」にて発表して

中村好男(早稲田大学・スポーツ科学学術院)

2008年3月9日。福岡大学セミナーハウスで開催された、九州スポーツ心理学会第21回大会のシンポジウム2「行列のできる健康支援」にて発表させていただく機会を得た。10時半からの開会であったが、福大セミナーハウスの受付にてしばし待っている間に、参加者の名前を何気なく見ていたところ、「甲斐裕子」の名前を見つけた。「東京から参加する人もいるのか」と一瞬驚いたが、すぐに「そう言えば、九大から福大を経て東京に就職したのだ」と合点する。

事前打合せの際、もう一人の講師である市丸りかさんが「西南学院大学でコミュニケーション論を学んでいた」ということを知る。そう言えば、と「入門・コミュニケーション論」の著者である宮原先生の名前を尋ねたところ、何と市丸さんは宮原ゼミの卒業生だとのこと。なんだか宮原先生と知り合いになれたような気がして嬉しくなった。

それはさておき、シンポジウムについては、市丸さんが「マーケティングの総論」を平易に解説し、私は「ウォーキング人口を増やすためのプロモーション手法」という演題で発表した。私としては、本シンポジウムの趣旨である「健康づくりにマーケティング手法を活用する」という事柄についてきちんと問題提起できるのかどうかという不安が大きかったのであるが、幸いにも市丸さんが、私の独りよがりの実践報告に理論的色付けを与えてくださって安堵した次第である。シンポジウムの終了後の昼食の席でも様々なアイデアが席捲し、とても実りある一日であった。驚いたことに、昼食会場(隣席)に宮原先生が偶然居合わせた。市丸さんを介して宮原先生とお会いできた事も、望外の喜びであった。

本原稿の送付先が群馬大学であるというように、「九州」という名の(実質的な)全国学会が、これからは多くの研究者の出会いの場となり、新たなアイデアと智恵の発現の場となることを念じている。

なお、今回の機会をいただいた福岡大学の山口先生には、最初から最後まで多大なるご示唆とご尽力をいただいた。あらためて、感謝の意を表する次第である。

「シンポジウム」にて発表して

森 司朗(鹿屋体育大学)

今回の九州スポーツ心理学会第21回大会にて、「運動学習と競技力向上」というテーマのシンポジウムで、「運動学習と脳」という演題で発表させていただいた。本テーマは提案者である福岡教育大学の兄井先生から、小生が「運動学習と脳」に関して、少しだけ脳と関連のあるようなことを研究していることから依頼されたのだと思う。運動学習と脳の関連に関しては、そもそも運動学習が、知覚系と運動系の協応関係の高次化であり、この高次化が脳内で生じる現象であると考えられる。脳内の現象は、当たり前だが、人間の生きている行動そのものを意味しており、このことは兄井先生の発表された運動学習の観点だけでなく、最後に発表された九州共立大学の伊藤友記先生の臨床的な問題に関する発表にもつながるものであり、これらの基本的な機能をつかさどっているものが脳である。しかしながら、私の今回の発表はその点で、ごく限られた現象の説明にとどまるものであり、多分発表時にフロアの方のご理解を深めるには不十分なものになったのではないかと反省している。

シンポジウムではフロアから多くの質問を頂き、シンポジウムの中味を深めることができた。頂いた質問の内容全体を省みたとき、今回のテーマである運動学習がいかに実際の運動指導場面で利用されていくかということを考えていくことが重要であり、このことがよりよい指導のあり方を考えていく上で重要なことになっていくのではないかと思った。さらに、この運動学習が、メンタルプラクティスのように、身体活動ではなく、イメージなどを利用した精神的活動を利用した方法の開発に関しても基本的な根拠を提供していけるのではないかと考えた。今回のシンポジウムを通して、小生としてはこれまで述べてきたように、今後の運動学習研究の発展の重要性を感じさせていただき、有意義な時間を過ごさせていただくことに感謝している。

「学生企画シンポジウム」にて発表して

小林洋平(名古屋大学大学院)

第21回九州スポーツ心理学会における学生企画シンポジウムのテーマは、「より良い研究活動のために今すべきこと 学生研究者の立場から」であった。九州大学大学院の永尾・山崎の両氏が中心となり、この企画の成功に向けて準備を行っていった。多くの学生が本シンポジウムに関わったのであるが、発表者として舞台上上がったのは、司会として鹿屋体育大学大学院の中本氏と演者として桜美林大学大学院の煙山氏・九州大学大学院の堀田氏・自分の4名であり、九州工業大学の磯貝先生に指定討論者として、参加していただいた。各々が遠隔地に住んでいることもあり、学会前日まで直接打ち合わせを行うことはできなく、メーリングリスト(ML)にて企画準備を行っていったのだが、100通を超えるMLでの活発な意見交換が発表までに行われた。それらの議論がなされていく中で、感じたことは今まで自分がどのような姿勢で研究と向かい合っていたのであろうかということである。また、他の学生がどのような態度で学生生活(研究)を行っているのかについての生の声を聞き、自分の態度についての意見をもらったことは、大きな刺激となり、自分の改善すべき点が見えたり、自信につながる部分もあった。このことは、今回の学生企画シンポジウムに関わった学生に共通することなのではないのかと思う。

当日の発表では過度に緊張してしまい、決してうまく発表できたとはいえないが、多くの先生方から研究をしていくためにすべきことに対してのご意見をいただけたことは非常に有益なことであるとともに、「やるしかない」という現実を突きつけられるような意見出たが、実際には「やるしかない」わけである。今回のシンポジウムは、学生や教員も含めて活発な議論ができ、成功したといえるであろう。しかし、今回の成功に浮かれることなく、これからもますます研究に励んでいこうという気にさせられるシンポジウムであった。とにかく、学生研究者として「やるしかない」のである。それに加えて、教員の方々が学生を厳しくも、暖かい目で見守ってくれられることもわかり、応援してくれる気持ちにこたえていきたい。

最後に、学生企画シンポジウムに企画段階から関わったみなさまに、ご迷惑をおかけしましたが、参加する機会を与えて下さり、ありがとうございました。

「ポスター」にて発表して

小松健一(東海大学)

2008年3月8日、9日と福岡県にあります福岡大学セミナーハウスにて開催されました、第21回九州スポーツ心理学会に参加させていただきました。私自身、九州スポーツ心理学会に参加するのは、今回が初めてでした。また、東海大学からは、私1人のみの参加だったので、最初は正直「アウェー」という気持ちで一杯でした。しかし九州の先生方からは、気軽に声をかけていただき、大変良くしていただきました。そのお陰もあり、今回のポスター発表は、最後の学会日に発表だったのですが、その時には私自身の緊張も解れており、良い心理状態で発表できたと思います。

今回私が発表した内容は、「高校野球選手を対象とした心理的サポートの影響 全国大会で優勝した高校野球選手を対象として」という題目でした。多くの先生方から貴重なアドバイスをいただき、とても有意義な時間を過ごさせていただきました。特に徳永幹雄先生からは、今回の研究で使用した心理的競技能力診断検査(DIPCA.3)についてのアドバイスやメンタルトレーニングに関する指導方法について深く伺う事が出来ました。

また、今回私がポスターを発表していた際にもとても熱心に質問を聞きに来られた、学部1年生の方がおりました。私自身を振り返ってみると、このような学会に初めて参加させていただいたのは、学部2年生時に筑波大学で開催された日本スポーツ心理学会でした。当時は、全てが初めてで、ポスター発表を見ても質問など、とても出来る状態ではありませんでした。しかしながら、私の所に質問に来られた学部生は、私とは違い、学部1年生にも関わらず、堂々と質問をしていました。その姿を見て、私自身も負けていられないという気持ちで一杯になりました。

今回、九州スポーツ心理学会に参加して、またポスターにて発表して心から良かったと心から感じております。最後に、自分を快く受け入れていただいた九州の先生方には、深く感謝を申し上げます。



「ポスター」にて発表して

松本 薫(益城町立広安西小学校)

今回、初めて九州スポーツ心理学会に参加させていただきました。学校現場の教師としてこの会に参加させていただいたことは、自分の取り組みを振り返る上で、とても意義深く貴重な経験になりました。

発表に向けては、事前に周りの先生方に聞いていただいたりして準備はしていましたが、「分かりやすく説明できるだろうか」「質問に的確に答えられるだろうか」という不安を抱えながら当日を迎えました。発表の日、学会の会場に行ってみると、他の方々の研究内容の深さにただただ驚くばかりでした。いざ発表の時間が始めると一気に緊張の度合いが高まり、夢中で話をしていました。発表の時間は1時間程でしたが、あっという間に過ぎた感じでした。私の発表に対して、さまざまな角度から質問をしていただき、温かい建設的なアドバイスをいただいたことで、新たな課題が見えてきて大変刺激を受けました。とてもありがたく思っています。

今回、初めての九州スポーツ心理学会への参加でしたが、学生の方々や参加されているみなさんの熱い議論に圧倒された反面、多くの方々から学び刺激のある出会いをさせていただきました。学会で発表された様々なスポーツやその他の運動に関する心理的現象を扱った研究は、とても興味深いものばかりだったのですが、今回は発表ということで他の方々の研究内容をじっくりお聞きすることができなかったので、次回は他の方々の研究をお聞きしたいと考えています。最後になりましたが、貴重なご意見をいただいた諸先生方ならびに分科会の事務局の方々に感謝の意を表します。



## 執筆論文紹介

### 博士論文紹介

村上貴聡(東京理科大学)

思い返せば今から2年前、平成18年4月に九州大学大学院人間環境学府から博士(人間環境学府)の学位を授与されました。まず、本学位論文の完成にあたり、温かい励ましとご指導を頂きました指導教官であります橋本公雄先生、また貴重なご意見を頂きました杉山佳生先生、そして修士課程在籍時より現在に至るまでの長い年月にて、ご丁寧に指導をしていただきました徳永幹雄先生に、この場を借りまして深くお礼申し上げます。本当にありがとうございました。博士論文執筆中は当たり前のことですが、ハードな日々でした。授業や会議以外の時間は一日中机に向かい合うばかりの日々が続きました。正直に言いますと、一時は執筆をあきらめかけた時期もありましたが、指導していただいていた先生、また周囲の方々のサポートによってなんとか乗り切ることができました。終わってみると、ある一つのものを完成させることの難しさ、またそれが意味のあることだということをととても実感しています。それでは、以下に論文の概要を紹介させていただきます。

#### <論文タイトル>

「スポーツ選手の競技パフォーマンス発揮への心理的健康および健康生活行動の役割」

本研究では、スポーツ選手が競技パフォーマンス発揮や競技力を向上するためには、スポーツ競技における集中力やイメージといった心理的スキルはもとより心理的健康および健康生活行動が必要であると考え、健康心理学的視点からのアプローチを行うことにしました。

本研究の目的は、青少年スポーツ選手を対象として、スポーツ選手特有の心理的健康および健康生活行動を明らかにし、心理的パフォーマンスとの関連を明らかにすることによって、健康心理学的視点から指導のあり方を考察することでした。具体的には、スポーツ選手特有の心理的健康および健康生活行動を測定する尺度の開発と作成した尺度の信頼性および妥当性の検討、作成した尺度を用いて、スポーツ選手の心理的健康および健康生活行動に関わる要因を分析し、その現状把握と問題点の検討、試合前の心理状態に対するスポーツ選手特有の心理的健康および健康生活行動の影響の検討、健康心理学的視点を加味した心理サポートを実施し、スポーツ選手の心理面に及ぼす効果の検証でした。

第1章では、スポーツ選手特有の心理的健康を包括的に捉える指標として、スポーツ選手の心理的健康評価尺度(MHSA: Mental Health Scale for Athletes)を作成し、その信頼性と妥当性についての検討を行いました。MHSAは「挑戦的態度」「自己理解」「危機回避能力」「個性の発揮」「積極的思考」「チームへの適応」「ケガへの対応」の7因子から構成され、信頼性および妥当性を有することが分かりました。また、スポーツ選手の日常生活のコントロール度を測定するための指標として、健康生活行動評価尺度(LMSA: Life Management Scale for Athletes)の作成を試みました。LMSAは「酒・タバコ」「心身のコンディショニング」「睡眠」「疲労・ストレスへの対処」「規則的な生活」「間食・嗜好品」の6因子で構成され、信頼性および妥当性が確認されました。

## 博士論文紹介(つづき)

村上貴聡(東京理科大学)

つづく第2章では、スポーツ選手を対象として、心理的健康および健康生活行動と性、競技レベル、競技経験年数、競技種目との関係を検討しました。その結果、競技レベルの高い選手は競技レベルの低い選手よりも、MHSAの「自己理解」「危機回避能力」「個性の発揮」、LMSAの「疲労・ストレスへの対処」「規則的生活」の自己評価が高いことが明らかにされました。また、競技経験年数との関連を検討した結果、競技経験年数が高い選手は、MHSAの「挑戦的態度」「自己理解」「危機回避能力」「個性の発揮」、LMSAの「心身のコンディショニング」の自己評価が望ましいことが認められました。最後に、競技種目による比較では、「挑戦的態度」および「チームへの適応」についてはチーム種目の選手の自己評価が望ましく、「個性の発揮」に関しては個人種目の選手の自己評価が高いことが示されました。

第3章では、競技パフォーマンス発揮に関連する心理的要因としてスポーツ選手の心理的健康および健康生活行動を取り上げ、その関与度を明らかにしようとしてきました。国体に出場した選手を対象にして分析を行った結果、MHSAの挑戦的態度、自己理解、個性の発揮は競技意欲に、積極的思考はリラックス能力および集中力に強く影響を及ぼしていました。また、個性の発揮は自信・作戦に、チームへの適応は協調性と関連していることが認められました。一方、LMSAの心身のコンディショニングはリラックス度に、睡眠は集中度に強く影響していることが明らかにされました。つまり、競技パフォーマンス発揮のためには、試合前の心理状態に影響する心理的健康および健康生活行動の下位尺度を高める指導も重要であることが示唆されました。

そこで第4章では、心理サポート実施群および非実施群に分類した上で、従来のメンタルトレーニングに生活習慣の改善や自己理解といった健康心理学的な視点を加味した心理サポートを実施し、その効用性を検討しました。その結果、スポーツ選手の心理的健康および健康生活行動のいくつかの項目で有意な変化が認められました。したがって、今回の心理サポートが選手の心理的健康や健康生活行動の各下位尺度に対して有効であったと思われます。

<最後に>

本学府は、私が修士課程に入学した平成10年に設置されました。つまり、私は本学府の一期生です。新しい大学院の博士号の価値は、学位を取得した後の活躍によって決まると聞いています。そのためにも、今後も研究活動に邁進していきたいと感じている次第です。



## 研究アラカルト

### 「私の研究室の紹介」

田島 誠(川崎医療福祉大学健康体育学科)

私は高校卒業までは北九州市で生まれ育ちましたが、大学生時代には九州を離れ、現在は岡山県倉敷市にある川崎医療福祉大学健康体育学科に勤務し始めて9年目に突入し、残念ながら九州という場所には縁遠くなっております。しかし、九州は生まれ育った地であり、学会の開催が3月という時期的な利点と数少ないスポーツ心理学の専門の学会であることから、この九州スポーツ心理学会ではこれまで何度かポスター発表させていただきました。今回は研究アラカルトを書かせていただけるという貴重な機会をいただきましたので、僭越ながら現在の私の研究室で主に取り上げている研究テーマについて簡単にご紹介したいと思います。大学院終了までは「複雑な両手協応運動における学習とタイミング制御」について研究してきましたが、現在はこのテーマに加えて、以下の3つのテーマに取り組んでいます。

#### 1. 知覚 - 運動スキル学習に関する研究

この研究では主に学習者にフィードバック情報を提示する際に有効なフィードバックスケジュールについて検討しています。エイミング課題として、ゴルフのパッティング課題を用い、学習者が打ったボールの位置を直接見えないようにして、そのボールの止まった位置を結果の知識(KR)として学習者にフィードバックします。その際に、KRのフィードバックスケジュールによって学習効果が大きく異なることが知られており、フィードバック情報の「エラー修正効果」とフィードバック情報への「依存性産出効果」のトレードオフによってより高い学習効果を生み出す最適なフィードバックスケジュールが検討されています。私の研究では、漸減的フィードバックと要約フィードバックの利点を組み合わせた「漸減要約フィードバック」というスケジュールを新たに考案し、その効果について検討してきました。これまでの大学生を対象とした実験結果によって、従来のフィードバックスケジュール以上に高いエラー修正効果とフィードバック情報への依存性の強い抑制を示した高い学習効果が認められました。その一方で、高齢者を対象とした実験では、大学生の場合とは逆に、他のフィードバックスケジュールよりも低い学習効果が示されており、今後の検討課題となっています。





## 研究アラカルト（つづき）

## 「私の研究室の紹介」

田島 誠(川崎医療福祉大学健康体育学科)

## 2. フェイク時の心理的不応期

スポーツにおける「フェイク」が相手の反応を遅延させることができるのは、心理的不応期という現象が中枢の情報処理過程で生じているからであると考えられていることはご存知かと思えます。この心理的不応期は、連続に提示される第一刺激と第二刺激に対して反応を行わせ、第二刺激に対する反応時間が単純反応時間よりも顕著に長くなるという現象ですが、これまでの研究では第一刺激に反応させることが前提条件で実験が行われてきました。しかし、実際のスポーツ場面での「フェイク」をみると、フェイク動作を行ったとしても相手側が必ずしもそのフェイクに反応しているとは限りません。もちろん、最初から相手側が最初の動作はフェイクだと予測していれば別ですが、実際にはフェイク動作を見た上で反応するかどうかを決定するという弁別反応事態が生じていると考えられます。そこで私の研究では、第一刺激に対する反応事態を弁別反応に設定することによって、実際のスポーツ場面により近い状況での心理的不応期の影響を検証しています。これまでの実験によって、第一刺激に反応しない場合でも、第一刺激と第二刺激の時間間隔が短ければ、第一刺激に反応した場合と同程度の心理的不応期が発生しますが、反応する場合と反応しない場合の弁別刺激の類似性が心理的不応期にも大きく影響することが分かっています。



## 3. ジュニアスポーツ選手に対するメンタルトレーニング

現在、岡山県では県内から選抜された小学4～5年生を対象とした「夢アスリート発掘事業」を行っており、今年で2年目になります。その事業の一環として、私を含む中国地方に在住のスポーツメンタルトレーニング指導士（補）が夢アスリート（小学4～5年生）とその保護者に毎月1回程度メンタルトレーニングの講習会を開催し、将来のオリンピック選手を育成しようとして頑張っています。

また、全国大会等で活躍している倉敷市の指定ジュニア選手に対するメディカルサポートとして、「医学的」「心理学的」「運動学的」「栄養学的」といった総合的なサポート事業を展開しており、今年で9年目を迎えました。私は心理学的なサポートとして、私の研究室の学生（現在16名）とともに、ジュニア選手のメンタルチェックやメンタルサポートを行っています。

以上のテーマ以外にも学生の卒業研究として様々な研究テーマに取り組みざるを得ない状況におかれていますので、これも勉強だと思って精一杯頑張っていくつもりですので、学会等では今後ともよろしくお願ひいたします。



## 2008-2009年 関連学会大会日程

学会名	開催日	大会会場
日本体育学会 第59回大会	9月9日～12日	早稲田大学西早稲田キャンパス(東京都新宿区)
日本健康心理学会 第21回大会	9月12日～13日	桜美林大学(東京都町田市)
日本心理学会 第72回大会	9月19日～21日	北海道大学(北海道札幌市)
AAASP(応用スポーツ心理学会)	9月24日～27日	ミズリー州セントルイス
日本教育心理学会 第50回総会	10月11日～13日	東京学芸大学小金井キャンパス(東京都小金井市)
SPSS Directions Japan 2008	10月21日～22日	東京ドームホテル(東京都文京区)
日本ストレス学会 第24回大会	10月31日～11月1日	千里ライフサイエンスセンター(大阪府豊中市)
日本社会心理学会 第49回大会	11月2日～3日	かごしま県民交流センター(鹿児島市)
日本スポーツ心理学会 第35回記念大会	11月14日～16日	中京大学名古屋キャンパス(愛知県名古屋市)
日本学校保健学会 第55回大会	11月14日～16日	愛知学院大学楠元キャンパス(愛知県名古屋市)
九州スポーツ心理学会 第22回大会	3月7日～8日	九州共立大学(福岡県北九州市)



## 《 九州スポーツ心理学会の紹介 》

### 沿革

本学会は、第1回が昭和63年3月に開催され、九州スポーツ心理学研究会として発足しました。第6回大会（平成5年）より九州スポーツ心理学会と改称し、学会としての組織化が行われています。平成20年3月8日～9日には、福岡市で第21回大会が開催されました。

### 目的

本学会は、運動・スポーツ心理学における研究と介入を促進することを目的としています。事業として、運動・スポーツに関する心理学的研究とその応用に関心ある人々のために年1回の学会大会を開催し、情報交換および交流の場を提供しています。

### 会員のメリット

1. 健康・スポーツ心理学に関するさまざまな情報が得られます。
2. 年1回の学会大会の案内が送付されます。
3. 「九州スポーツ心理学研究」が送付されます。
4. 健康運動指導士の公衆ポイントが得られます。
5. 日本スポーツ心理学会「資格認定スポーツメンタルトレーニング指導士」の研修ポイントが得られます。

## 《 学会入会希望の方へ 》

入会をご希望の方は下記の項目を記入の上、事務局まで郵送またはE-mailにてご連絡ください。

1. 氏名
2. 所属機関
3. 連絡先（勤務先・自宅）
4. 電話番号（勤務先・自宅）
5. FAX番号（勤務先・自宅）
6. E-mail

連絡先 〒820-8502 福岡県飯塚市川津680-4  
九州工業大学情報工学部 人間科学講座内  
九州スポーツ心理学会事務局 磯貝浩久 宛  
TEL&FAX:0948-29-7872  
E-mail: kssp@fukuoka-u.ac.jp

あとがき

九州スポーツ心理学会会報「健康と競技の心理 (Psychology of Health & Sport)」第13号をお届けいたします。

さて、本号は今春に開催された九州スポーツ心理学会の第21回大会の報告を中心に編集を行いました。九州スポーツ心理学会は昨年に20回大会が盛大に開催され、人間で言えば、めでたく「成人式」を迎えたこととなります。今回の第21回大会は、成人から、次のステップへ更なる飛躍を期して歩みを始めた、新たなスタートとも考えることができます。

今回の学会は、興味深いシンポジウムやワークショップが複数企画され、また複数の大学院生が企画し、協働の学生企画が催され、新しいスタートに相応しい、内容の充実した大会が開催されたように思います。

この先を見つめると、成人が中年に差し掛かる10年先頃には、本学会も一番油がのった充実した時期となっていくのでしょうか？あるいは、新しい方向性を見出しているのでしょうか？いずれにしろ、今後の行く末をじっくりと見守っていきたいと思います。

最後になりましたが、お忙しい中、快く本NLの御執筆を頂きました先生方および大学院生の皆様、誠にありがとうございました。厚く御礼、申し上げます。

(西田順一)

